ムッゴロウ世界漫遊記之内

象使いの弟子

下

畑 正憲

中央公論社

象使いの弟子 下

定価七八〇円

昭和五十五年四月二十日印刷
昭和五十五年四月二十五日発行

著者　畑　正憲

発行者　高梨　茂

印刷　三晃印刷

発行所　中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二ノ八ノ七
電話（五六一）五九二一
振替東京二-三四

©一九八〇
検印廃止

象使いの弟子＊下＊目次

第七章　これがこう　あれもこう　7
アイ・アム・ア・ドクター
いま感じる内なる象
ミランゴダ氏秘密を語る
第八章　象は太陽だ　42
はい、スッポンポン
象のように素晴しい象
ハロー・ハロー・ハロー
第九章　象使いとして一生ここに　76
わが友ダルダメア
川賊との愉快な再会
象が動いた、思いのままに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第十章　翔べ！　アリア　111
仔象のようにたらふく食べて
前後の危難に耐えて
バハマホンダイの美酒
第十一章　すべては遊びの中に　147
メディカル・サイエンス
日暮れの友情
忙しく華やかな夜
第十二章　ムツゴロウ氏涙の退去　182
濁流の再会
ピチェ・コトマリア！
この小さな丘で
あとがき

カバー写真／ジェルミ・エンジェル
挿画／木佐森隆平
カット／畑正憲

象使いの弟子　下

――ムツゴロウ世界漫遊記之内

第七章　これがこう あれもこう

アイ・アム・ア・ドクター

寝返りをうつと、古いベッドがかすかにきしんだ。温まっていない部分が肌に触れて、冷んやりとして気持がよかった。

前の日、ちょっとだけ夕立があった。雷が鳴って、天の底が抜けでもしたかのように、どっと水が落ちてきた。木の葉が叩き落とされて流れていき、庭にたくさん臨時の小川が出来て、その川面に色とりどりの花が浮かび、大粒の雨に叩かれて踊りながら合流点でくるくるっとまわったりしつつどこかへ運ばれていった。

ラクニワサ荘のボーイたちは、口をとがらせ、寒い、寒いと連発し、慌てて長袖のシャツを着こんで袖口のボタンをきちんとかけた。私ときたら下はバーミューダ、上半身は裸でやっとすこ

し涼しくなったとほっとしているというのに、まわりの人たちは雪でも降ってきたかのような大騒ぎをしたものだ。

スリランカの人たちは、長い袖のシャツと長ズボンを愛用する。荷物の中にサイズの大きな半袖のシャツがまぎれこんでいたのでジバにプレゼントしようとしたところ、

「日本の衣類は素晴しいので、喉から手が出るほど欲しいけれど、どうせなら長袖のものにしてくれないか」

と言われてしまった。

私は、暑い国で長いズボンとシャツを着るなんて、単なるおしゃれだと思い、ヨーロッパの真似をしなくてもいいのになと苦笑したものだが、実は常温のレベルが、大きく違っているものらしい。三十度Cあたりが適温のレベルで、それより四度そこそこ気温が下がると、彼らは寒く感じ始めるのだ。

雨は一時間ばかりであがり、夕食の後、犬のシンディを連れて散歩に出ると、もうすこし背が高かったら頭が届きそうな所に星の洪水があった。その星空に、右や左から椰子が黒々と伸びて葉を広げていた。星空のカンバスを椰子のシルエットで切抜いている感じだった。

ため息をついて眺めていると、シルエットの中に星が飛びこんできて、ゆうゆうと泳ぎ始める。これは一体どうしたことだと目をこらすと、雨の後、ようやく高くへ舞い上がった螢たちだった。螢は次第に数を増して、ついには星だか螢だか分からなくなり、見たこともない星座が現われ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

次の瞬間、すうっと形を変えるのを愉しんでいた。

それは、子供の頃の夜空だった。空をよごし、星が遠くへ行ってしまった国にはＵＦＯが飛ぶけれど、螢と星が語り合う空には、お伽話が飛び交っている気がした。

部屋に帰ると、洗面所の電灯を消し忘れていたので、超大型のカゲロウが雲のように舞いこんでいたのには愕いた。洗面所はもうジャンボカゲロウの養殖所であり、大げさではなく、便器がどこにあるか分からぬくらいであった。ふたを開けて小便をしたら、別にねらってなんかいないのに、何十匹か撃墜してしまった。

日頃よりずっと涼しいので、昨夜私はこの際とばかりに早目にベッドにもぐりこんでしまい、たぶん八時頃からだったと思う、一気に眠ってしまったのである。それで陽が上がらぬうちにぽっかり目が醒めてしまった。

早起きの小鳥がちちと啼いた。

三方にある窓がぼんやり青い。

私は煙草に火をつけた。目をつむって考える。ニラとは果たして何なのだろう。

ミランゴダ氏は、ニラはおよそ五百はあろうと言った。もちろん氏は、そのすべてを熟知しているが、実用に供し得るものは約二百であり、マフートに伝授しているものは五十そこそこだという。

ニラとは何か。

皮膚に点在する灸のツボみたいなものだろうか。

人体や動物の体の表面に、何だか不可思議な神秘な点が在るのを私は知っている。まだ中国の針麻酔が紹介されない頃、東北大学の医学部で、電気的にツボをさぐっていくところを見学したことがある。良導絡ナントカという難しい説明をして貰ったが、要するに皮膚には生命の活動と直結する、摩訶不思議な急所があるもののようであった。その地図と象のニラの分布図が、私の頭の中で重ね合わされた。さらにまた、針麻酔をする際の体の急所の分布図を、ちらとのぞいたこともあった。それとも似ている気がしていた。

針麻酔では、ある急所に針を刺すと、味覚さえ変え得るという。また、ある種の行動をコントロール出来るともいう。刺激がどのように伝達され、どんな具合に効果をもたらすのかは分からないまでも、経験の積み重ねによって、急所があることは万人の認めるところになりつつある。象のニラというものもあるいは、その系列に属する、案外と重大な、頑固な秘密なのではあるまいか。

私はいく本も煙草を吸った。考えごとに熱中しているので、長くなった灰が、枕元にいくつも落ちた。

ふと気がつくと、夜は完全に明け、いつもの朝の豪華なシンフォニーが始まっていた。

金属的な、澄んだ声の繰返しはリスである。カラスが騒ぎ、オウムがさえずり、マイナーバードが含み声で啼いている。ゴムの林で啼く小鳥の声は、音で辺り一面を塗りつぶしたようなバッ

クミュージックである。

田んぼでは、ブオンという食用蛙、ケロケロという青い蛙、加えて何種かの蛙がいっせいに歌い始めている。

ののしる声は農夫のものだ。暑くならないうちに、水牛を叱咤して田んぼを耕しているのである。

なかなか盛んなものであった。

運ばれてきた紅茶をベッドで飲み、裸足のまま洗面所に入ると、舞いこんだカゲロウのほとんどが死に、床にも便器の上にも降りつもり、五センチぐらいの層になっていた。これもまたなかなか盛んなものである。

朝食はタミール風カレー料理だった。インドのナンに似た、小麦粉を焼いたものに、タマネギを唐辛子であえた赤いペーストを塗りつけて食べる。コックでもあるジバが、ダイナマイトだから気をつけるようにと言ってくれたが、なるほど小気味のいい辛さであった。

パパイヤの果肉をスプーンですくいながら、ジェルミがぼそぼそと、

「今日はどうします？」

「うーん」

私はパイナップルをナイフで切った。

「水の中で遊びたいですね」

「うーん」
「オーファネージに行きませんか」
「でもね」
「何ですか」
「ニラについて知りたいんだよ。今日はね、おれ、強引に頼みこんでみる」
「え？」
「馬に乗るコツを、最も早く体得するのは、遠乗りが一番なんだ。走らせなくていいから、一日に二十キロか三十キロ、馬の背に乗っていると、体の方で自然に、馬に乗るとはどういうことかを学んでしまうのだよ。おれ、今日はおれの方法で、遠乗りをさせてくれと頼んでみるよ」
かくて私たちは出発した。
オンボロ車で田舎道を走り、いくつもの長い橋を渡り、煉瓦を焼く小屋を通り過ぎ、バナナ畠まできた時、前の席に坐っていたジェルミが叫んだ。
「ストップ」
道端の小さな溝の上に、巨象がうずくまり、まわりに人が十人ばかり集まって、何やら鋭く叫び合っていた。
運転手が事情を聞き、説明してくれた。
象は林から道に出ようとした。

ところが、久し振りに降った昨夜の雨にも関係があるだろうが、垂れ下がっている電線が有刺鉄線に触れてしまい、そこにまた象が触れてショックを起こしてしまったのだそうだ。

なるほど、すぐそばに電柱があり、切れた電線がぶら下がっていた。道との境に、有刺鉄線もあった。象は馬と同じで、電気のショックには弱いらしい。

象は目を閉じ、脚を折って、ピクリともしなかった。まるで死んでいるかのようであった。マフートは青くなり、ただオロオロするだけであった。

私は駈け寄って、指で目をこじ開けた。瞳孔はちゃんとしていた。散大してはいなかった。

体に耳を圧しつけてみた。けれども、ボワーンと、漠然とした音のかたまりが伝わってくるだけだった。

待てよショックなら——と私は考えた。注射も薬も持っていないのだから、マッサージをするに限る。

そこでジェルミと手わけして、象を両側から、平手でもんだり叩いたりし始めた。

マフートはかなりびっくりしたもようだった。いきなり日本人とイギリス人の珍妙なコンビが出現し、おそれげもなく目をこじ開けたり、口の中をのぞきこんだりしたかと思うと、象をピタピタ叩き始めたのだから。

彼は何か言って詰め寄ってきた。

私は、この時とばかり、おごそかに言ったものだ。

「アイ・アム・ア・ドクター」
運転手がシンハリ語に訳してくれた。
すると、まわりに立っていたものたちが象のまわりに集まって、私の真似をし、象をもんだり、さすったりし始めた。
「ようし、よし」
私は首筋を撫でた。
かくて約十分——。
筋肉の内部に、ひくりという感じの動きが起こった。同時に象は、ゆっくり、ゆっくり息を吸いこんだ。それをまた、ゆっくり吐き出した。
今だと直感し、私は象の真ん前に立って、
「ダハ。ダハ・アリア」
と、声高らかに叫んだ。
すると、まわりの人たちは、一瞬びっくりした顔つきをしたが、すぐゲラゲラ笑い始めた。日本人が、思いもかけぬシンハリ語をつかうのがおかしいのだ。
私は構わず叫んだ。
「ダハ！　ダハリア」
すると象に反応が現われた。のろのろと、立つ仕草を開始したのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c